

# 肺癌検診で三度の見落としも 自治体格安検診に気をつける

自治体が市民の健康増進のために  
行っている各種検診。

無料か少額の自己負担で受けられるが、杜撰な検査で重病が見落とされる恐れもある。

七月には杉並区の河北健診クリニックで実施された肺癌検診で、三度にわたってがんを見落とし、四十代の女性が死亡したことが発覚した。

「亡くなった女性は二〇一四、五年に勤務先の保険組合の検査を同病院で受診したが、クリニックの医師は『異常なし』と判定してしまっただ。今年一月にも四十歳以上であれば五百円と格安な区の検診を受診するも、読影（画像診断）の専門医が不在のまま診断された。悪化を辿っていた病変はこの時も見過ごされてしまいました」（社会部記者）



また驚くべき事実も。

「同病院で一四年以降区の肺癌検診を受けた九千四百二十四人のX線画像を放射線科医が再度調べた結果、四十四人に精密検査が必要との判定が下った。うち二十七人に肺癌の可能性がある」（同前）

同病院での区の肺癌検診は粗雑なものだったという。

「年間約五千人があつた病院で検診を受けています。一日に一人の医師でレントゲンを何十枚と読影する必要があります。現場には一枚一枚丹念に見る余裕などはなかったはず。さらにクリニックでは放射線の診断専門医が慢性的に不足しています」（病院関係者）

病院を経営する河北医療財団の河北博文理事長は、今年一月の「見落とし」について、こう釈明する。

「専門の画像診断医でなかったことは本当に申し訳なかった。個々の医師の診断能力の問題もありましたが、一時に数十枚の胸の画像を読影することもある。なので判断で流されてしまった部分もあった

のではないかと思っています」  
医療問題に詳しい石黒麻利子弁護士（医学博士）はこうアドバイスする。

「自治体の集団検診はあくまで全体の死亡率を下げるのが目的です。医療裁判でも集団検診については『医師の注意義務には限界がある』との判例があり、もし訴訟になっても勝訴できる可能性は低いのが実情です。レントゲンだけでは病変がうまく写らないケースもあり、CTやMRIなどを併用して複合的に診断する人間ドックを定期的に受診することを勧めます」

この機に自分が受けている検診をチェックしてみよう。